

今回ご多忙の中ワークショップにご協力いただいた参加者は、帯広市内の学校に通う中学生、高校生、大学生、それぞれ約 10 名の皆さんです（計 28 名）。参加者がおよそ同じ割合の人数の 4 つの班に分かれて、ファシリテーターから与えられた課題への回答をグループ対話によって生み出していきました。ワークショップの進行を務める総合ファシリテーターの長尾彰さん（ナガオ考務店）は、合併した会社の中の会話をとり持つなど、コーチング・チームビルディングの専門家として活躍されています。また大学生は事前研修でファシリテーションについて簡単な体験講習を受け、各グループのファシリテーション補助を担当しました。

大学生のほとんどはファシリテーション初体験でした。事前研修では長尾さんから「対話・イノベーション・ファシリテーションとは何か」を、ワークショップ体験を交えながら学んでいきました。

対話とは、多様な意見を取り込むための話し合いです。回答に正解はありません。対話を促進するためには、参加者が対等に話しやすい雰囲気を作る・理解しようとする・いろいろな意見を取り込むという、環境づくりをする役割をもつ人がいるのが効果的であるといわれています。それがファシリテーターです。それを踏まえて長尾さんからは、「無理に場を仕切るとかははなくていい・参加者の中高生の意見に関心を持つことが大切」とのアドバイスがありました。

なお大学生は、帯広畜産大学の学部生・大学院生です。帯広畜産大学は非常に多くの地域から学生が集まります。今回のワークショップ参加者の出身地も、北海道から沖縄県まで日本全国・また国内にとどまらず韓国、中国、ミャンマーと多岐にわたります（ちなみに今回の留学生参加者 3 名は全員日本語が堪能です）。一方、中学生・高校生は、ほとんどが帯広・十勝の出身者です。

---

1 日目は、これまでの 10 年間で、自分、地域、自国内、世界で何があったかをテーマに振り返ってみようということテーマに話し合いました。4 班にグループ分けされた参加者が、まずテーブルを取り囲んで自己紹介などを行いました。各班の雰囲気は様々で、初対面の参加者がお互い慣れない場でどう振る舞ったらいいかわからず、戸惑いながらのスタートになりました。

その後長尾さんから、今回のワークショップの最終目的として各グループからの「幸せ指標づくり」が提示されました。幸せ指標の例として、友達と一緒にご飯を食べる日数が週 2 回あったら幸せ、などが紹介され、大人は若い人々が何に夢中になっているかわからないので何に夢中になっているか、皆にとっての普通は何か・幸せの基準を教えてください、とワークショップの目的が紹介されました。そのための過程として、1 日目は「過去を振り返った年表を作る」、2 日目は「未来を予想する年表を作る」という課題も与えられました。

まず 1 日目の話題提供者として、帯広市役所・産業推進室の中尾啓伸さんから、「フードバレーとかち」をテーマに帯広・十勝の農業を基幹産業とした地域を盛り上げる取り組みについての講義がありました。屯田兵による国営開拓地とは違う、晩生社による民営開拓地・十勝という地域の歴史の紹介があり、産業を盛り上げることで仕事ができる・暮せる、その先には地域みんなの「幸せ」「ゴキゲン」がある、それを目指すために、ものづくりなどで十勝の農業中心のフードシステムのポテンシャルをもっと伸ばそうというのが、「フードバレーとかち」の取り組みです。

その後参加者は 30 分間、各班ごとに講義についての感想や質問などを付箋に書き出しながら整理していく作業（グループワーク）を行いました。大学生が司会となり、書記やタイムキーパーを決めて進められます。

班によって作業の進め方は様々です。こんなことを疑問にしてもいいのかな、という素朴なことを大学生がまず書き出すと中高生からも疑問が出やすく、それをどんどん書記が模造紙に書きながらという具合に同時進行で発表し、みんなで共有することをきっかけにして話が展開し新たな疑問が出てくる、という傾向が見られました。

また椅子に座って各自で付箋に書き出す作業を行っている班は、参加者それぞれが何を書いたらいいのかわからず固まってしまい誰からも質問が出ずに停滞していました。逆に参加者が席を取り囲む形で立ちながら、模造紙に書いたり付箋を貼り付ける作業をしていた班は、活発に質問が出て話が進んでいました。

各班から出た質問を見た限りでは、農業・産業に関する技術的・専門的な疑問・質問よりも、経済的価値そのものに対する素朴で根本的な疑問・質問の方が、新しい観点で価値を問い直せて、新たな話題へと発展する傾向が見られました。

その後、1日目の目標である「この10年を振り返っての歴史年表をつくる」という作業が各班で進められました。自分・家族・地域・日本・アジア・世界の出来事について、1年ごとに自分で書き出しながら・またスマートフォンなどで調べながら付箋に書き出し模造紙にまとめる作業を行います。

まず、歴史について調べる作業では、各自がスマートフォンでネット検索作業を行っている間、参加者が黙々と一人で作業をして長時間対話が行われないうという光景が見られました。またスマートフォンがないなどの理由で、異なる世代の学生が2人一緒になってネット情報を検索しているところでは、結果としてその作業の際の会話が見られ、それが結果として対話となって展開していく・その共同作業を通じて次第に雰囲気が打ち解けていく過程を見ることができました。今回のワークショップでは情報機器の使用は自由でしたが、ネットを使った個々による検索作業の間は、結果として対話がなくなることを示しています。

また、ふるさと・十勝の歴史を小学校で学び常識としている中高生に対し、他地域から帯広に進学した大学生は十勝の歴史について意外と知らない・逆に中高生に教わることが多いということがわかりました。今回のワークショップは多くの大学生にとって十勝の歴史に初めて触れる機会となりました。このことは世代の違いだけでなく、テーマにもよりますが育った地域でも参加者の知識的背景が異なることを示しています。

年表に張り出す・書き出すなどされた過去の出来事を見ながら、歴史の変遷について各班で話し合うという課題の作業では、課題のとらえ方や表の作り方など、各班ともどうやってまとめたらいかが戸惑いが見られました。しかし、各班で同じ表を見ながら・作りながらの共同作業で会話は増えてきたようです。また、携帯電話やゲーム機など身近なエピソードを中心にしながら「そんなことあったよね」と共通の「あるある話」ができていたところでは、世代を超えた共感ができてそこから会話が出て、対話へと発展していたようです。やがて夕食の時間になり弁当が提供されましたが、1日目の作業が終わった解放感のせいか、各班の参加者は課題を離れた雑談の中で打ち解けていく様子がうかがえました。

---

2日目は、まず大学生だけが事前に集まり、ファシリテーション補助に関する打ち合わせが行われました。1日目の経験をみんなで出し合う中で、思うように話が進んでいかない・結果がうまく出せないこと・ファシリテーションの難しさという悩みがいくつかでてきました。このような経験は普段の大学生活ではあまり経験しないので、多くの大学生にとって初めてだったと思います。

長尾さんからはアドバイスとして、「沈黙に耐えられない時には無理に引っ張ろうとせず逆に参加者に任せてしまってもいいし、対話は何も起きなかったという体験もいい」、「自分が1mくらい下がって任せたらいいこともあるし、自分が介入したらいいこともある、その時自分がいいと思ったことをしてくれればいい」、「上手にまとめる・うまくやる必要はないから、自由に2日目を楽しんでほしい」、というアドバイスがありました。

中でも「中・高・大の学生が話し合うのが最大のテーマだから、目標は十分に達成している、だから今日は十分に楽しんでほしい」という長尾さんの言葉に、大学生の気負いも多少は解けたのかもしれない。

中高生もそろって始まった2日目は、新たに加わった高校生もいたため、改めて各班で自己紹介などが行われました。1日目は何を話していいかわからなかった中高生も、2日目になると趣味の話などができて盛り上がるようになり、前日より慣れてきたようです。大学生のファシリテーション補助も、「10年前って何歳だった?」「その時って何していたのかな?」など、うまい合いの手を入れられるようになってきています。

まず朝と言えば体操、ということで、長尾さんの呼びかけで左右のリズムの異なるちょっと難しい体操を行いました(コーディネーショントレーニング)。参加者が二人一組となり向かい合ってお互いの動きを見ながら体を動かし、お互いにうまくいかない・うまくいって喜び合うという体験を通じて、参加者みんなに笑顔が見られたアクティビティでした。

その後、2日目の話題提供者として、北海道経済産業局の木村文昭さんから「北海道と日本の現状」をテーマに、10年後を考える上でのキーワードについての講義がありました。木村さんは経済産業省や帯広市役所での業務経験を踏まえたコミュニケーションの重要性について触れました。また、北海道・十勝という地域の特徴を、食や環境・観光を中心に紹介しながら、国内・国際双方の交流において仲間を増やしネットワークを広げていくこと、会って話す・メールなどのコミュニケーションツールでやり取りすることが、将来の私たちや皆さんの力になっていく、という提言がありました。

その後休憩15分を挟んで、各班で1つずつ木村さんへの質問を出し合うということを行いました。前日に比べると各班の雰囲気は打ち解けてきており、質問の筆が進むところもあれば、「そういえばネットとリアルのコミュニケーションギャップってない?」などの会話に話題が弾むところもあります。このような一見すると雑談や脇道話も、2日目だから生まれた動きなのかもしれません。新たな対話の展開の種になりそうです。

質問タイムのあとは、次の10年の予想を立てる作業になります。前日の年表とは逆に、10年後の自分・家族・地域・日本・アジア・世界の出来事を1年ごとに予想しながらの作業なので、1日目よりは回答の自由度が高まっています。1日目はあまり話が出なくて停滞していた班も、答えがない未来の予想については話が出やすくなっているようです。

また、中高生の中には文章を書く・話すよりも、絵で描くことの方が得意な参加者も多く、付箋紙への落書き的なイラストを見つけた大学生が興味を示してどんどん描いてもらい、お互いに描いた似顔絵や将来の夢の絵などイラスト付きの付箋がどんどん増えていくといった現象も見られました。言葉以外(絵や歌など)の得意な表現の形をとらえてファシリテーションにより採り入れ伸ばしていくという動きは、その後の会話や対話の雰囲気づくりの醸成に大いに役に立つ発見だったと思います。高校生・大学生では10年先の将来に人生設計や夢、結婚や家族を想像する人も多く、恋愛話で盛り上がるグループもありました。

その後各班で、幸せ指標を最低10個ずつ作る、という作業が設けられました。自分や家族、友達、地域、国、世界の幸せとはどんなものかを、今から10年後について考えながら作っていくというものです。対話・作業に慣れてきた、また昼食を食べながらの作業ということもあり、1日目よりはリラックスした雰囲気になっていました。1日目は場に慣れていなかった中高生が、大学生を身近なお兄さん・お姉さんといった感じで頼れるようになったこと、また大学生が作業の結果を出すことにこだわり過ぎずに中高生に寄り添った会話や態度ができるようになったことが、対話の雰囲気の醸成には大きかったのかもしれません。

各班とも指標を決めるためのスタイルはいろいろです。出そろった質問を前に大学生が「うーん、どれにしようかね」と中高生に選んでもらっているところもあれば、似たような指標をグループにまとめて回数などの数値を調整し合うところ、班内の意見は様々だから一人2個ずつ自分の意見を選んで班の意見として採用したところもあります。

最後にみんなが輪になって席を作り、それぞれの班でまとめた「幸せ指標」を、各グループが順番に前に出る形で発表会をして、一連の作業は終わりました。その後、2日間を振り返って10分間の自由感想タイムがあり、3名ほどの大学生が「このような機会は初めてだったけれど、こういうワークショップの楽しさが広がってほしいと思う」「何か課題があった時にこのようなことを企画してみたいと思う」「母国にもこのような機会を広げていきたい」等の発言をして、2日間の会議は終わりました。

参加者の皆様・ご協力いただいた皆様、話題提供下さった講師の皆様、ファシリテーターの長尾さん、ご支援いただきました関係者の皆様はじめ、この2日間のワークショップのために多くの時間と労力を割いていただいたすべての方々に、深く感謝申し上げます。

記録 山本俊介・ライター